女學雜誌

一冊六錢

各土曜日出版

第百七拾九號

當府内無郵税

郵税一錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

雜 女

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 179. SEPTEMBER 14TH, 1889.

第百七十九號目錄

EDITORIAL:—Women and Patriotism.
LEADING ARTICLE:—A Query in respect ot "How to Read Novels."
CRITICAL NOTES:—"Physical Development." "Goldsmith's Character."
MISCELLANEOUS:—Active and Passive Heroes. Mrs. Garfield's Bread. About being Busy. Children's Training. Notes about "The Red-Cross Society" Work.
DROLLERY.
HISTORICAL RECREATIONS:—Thomas Carlyle.
CHILDRE N'S COLUMN.
CONTRIBUTED ARTICLES.
GENERAL NEWS.
FOREIGN NEWS.

社說　婦人及愛國の情
論說　「小說論略」質疑(松羅堂主人)
批評　躰育美貌論○ゴールドスミスを評す
雜錄　自動的の英雄、他動的の英雄○大統領ガーフヒールド氏夫人の麵包○多忙○女性と公事國事○男達が欲しき○赤十字社錄事
笑草　三件
史傳　カーライルの傳(た、さ)
兒鑑　チャーレーの臆膽
寄書　誤り易き言語(依田雄甫)
新報　驚くべき女子教育の進歩○レビット夫人○亡き母の遺志○躶躰人の畫
外報　生繭○懸賞○料理學校
片々　女官方の義捐○京都婦人慈善會の義捐金○上益城郡中島村婦人親睦會○紅楓女學校

WOMEN IN JAPAN.

(1) *The Girls' School begun by the Quaker Missionaries has so increased in number that they have built a more commodious schoolhouse in Mita, Tokyo.*

(2) *A Chinaman made an attempt to kidnap a 12 years old girl who was out playing in an Azabu street.*

(3) *The news of the terrible consequences of the Kumamoto earthquake came to 3 Missionaries of Kumamoto spending their summer vacation on Mt. Hiei in Kyoto. They at once went back to the scene of devastation carrying a contributed amount of money for the relief of sufferers. Miss Clark who is one of the 3, even offered to some as nurse in the hospital for the injured.*

(4) *More than 1 Girls' School in Tokyo are thinking seriously of adopting the much-talked-of cottage system of education. We sincerely hope for their success.*

誌 學

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百七十九號
明治二十二年九月十四日發兌

社說

○婦女子及び愛國の情

第一 日本の國民幾千ぞ

犬の相ひ闘かふを見よ、双方强弱に優劣なくとも、人ありて若し其一方に贔負すれば、贔負せられたる犬忽ち元氣づきて猛勇十倍す、敵する犬の委縮して逃げざるとなし、夫れ感發遲鈍なる犬にして尚ほ斯の如し、况んや人に至りては其の贔負せらるゝとの多少によりて元氣の增減すると更に著じるし、之を以て人間社界の勝敗優劣は、多くは愛顧賛成の多きと少きとに由りて決す、相撲取は喝采を受けて力ら百層倍し勇士は佳人の一顧に感じて修練更らに加わり、政事家は輿論の後推しによりて意見を主張すると彌よ强きを得、皆是れ其の愛を受るとの多きを以てます〱益ありとする也、思ふに一國の强弱盛衰は亦た其國民の愛を受る多少に關す、國民皆な其國を愛せば國强からざらんとするも得ず盛んならざらんとするも得ず、然れども國民にして若し其國を愛せずんば兵力山を拔き軍艦海を蓋ふと云へども國必らず衰弱すべし、故に國は一人たりとも贔負する人の多からんを欲す、一人たりとも愛國者たるもの丶多からんを欲す。

日本に人口三千九百万ありとせよ、三千九百万の人若し悉とく日本を愛せば、日本は實に三千九百万の愛國者ある也。彼等は或は官員となり、或は書生となり、或は大臣となり、或は草履取となりて皆な日本の爲めに盡力すべし、即はち日本は三千九百万の護國者を有する也。然るに此の人口ありと云へども、其中もし眼こに日本を見ず、心に日本を思わざるものあらば、其人稱して日本人と云ふと云へども既に日本の人民にあらず、如此くんば日本に名目に於て三千九百万の人民ありと云ふは可也、實に於て三千九百万の日本人民ありと云ふ時は誤まりあるべし。

幸はひにして我國の同胞は特に愛國の情に富めり、恐らく何人と云へども皆な日本と云へる觀念を頭らに深く銘し、日本人と云へる感情を心に溫たかに刻み付けざるなけん、若し家康が誇りを以て立派ある誇りと爲すを得ば、日本は万國に向つて其愛國者多きとを誇るとを得べし、神洲果して何事か優れる、其狹き地面に莫大の人口あるが故のみにあらず、實に眞正なる國民の數莫大なるとを以て優さる也。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

日本實に愛國者多し、然れども若し或る尺度を以て愛國の情の多少を測ることを得ば、日本亦た幾多の愛國情極めて乏しきものなきを得ず、現に女流の如きは多くは國家と云へる感覺に於て至つて薄し、日本人民中如何なる種屬が尤とも愛國の情に乏しきと問はば、吾人は恨を呑んで是れ女性なりと答へざるを得ず。　試みに婦人に向つて我總理大臣の誰なるやを聞け、答へ得るものは極めて少なからん、又試みに之に居留地を置くとの國辱なるを告げよ、感じ得るものは極めて少なからん、豈啻だ之のみならんや、一朝外讎襲ひ來りて日本亡國すと云へども、其の涙を流すとの尤も遲きものは恐らく婦人なるべし、彼等が國家を思ふの情甚はだ冷やかなり、故に其の之を愛するの情も亦た至つて寒からざるを得ず。

一千九百萬の日本國婦人は實に日本人民にあらずや、一千餘萬の戶々に女王たるものは實に其家を愛する者にあらずや、彼等すでに家を愛す而して國を愛するを得ず、彼等既に日本の民たり而して日本の國民たるを得ず、若し一國は一家の集れるより成ると云はゞ日本殆んど國なし、若し國民は一民の集れるより成ると云はば日本半ば民なし、如此きは豈に我等が旦暮に思ひ夢寐に思ふの日本帝國に益あるとならん哉。

第二　婦人國を愛するを得ざる乎

然るに婦人の天性は決して如此きものにあらず、彼等は極めて愛情に切なるものあり、故に能く國を愛することを得、彼等は至つて家を愛するものなり、故に亦た能く國を愛することを得、彼等は亦た公事に注意し國事に盡力することを得るものなり、安んぞ其の國を愛せざるものならんや。

古來大國に君臨し萬民を統治して威德を百世に芳ばしくしたるもの、我朝の神功皇后、支那の則天皇后を初めとして、ニナスの女帝セミラミス、ハリカルナッサスの女王アルテミシア、パルミラの女王ゼノビア、の如き、或はクレヲパッラの如き、女王エリザベスの如き、カスチルのイサベルラの如き、アウストリアのマリアセラサの如き、魯士亞のカゼリン大女王の如き、現に英國に王たるクイン、ビクトリアの如き、間ま其名の道德に於て汚れたるもの之れ有りと云へども、其の國民を愛撫し、一國を憂慮し、能く天下を治むるの技倆を現はしたるに於ては、後世實に異論あるなし、彼等既に國に帝王たり、誰か彼等に愛國の情あるを得ざりしと云はん。

豈に啻に帝王たるのみならんや、古來女性にして國に犧牲たりしもの甚はだ多し、彼等は皆な當世に於て衆に擢んずるの

愛國情ありしもの也。現今英米に於ては、婦女子にして學務委員となり、州會議員となり、市長と爲り、府知事となり、更に亦た國會議員たらんとして、其の大勢の趣むく所ろは、日に日に彼等が能く國を愛し國に盡すとを確證せり、之を以てグラッドストーン氏も、サウリスベリー氏も、ビスマーック氏も、女性を國家の公事に適用するの必要彌よ增し機運彌よ熟するとを明言し、而して女性もし國家の公事に分任せば社會上の道德大ひに淸まるべきとを證言するに至れり。セミラミス女帝曾て其功德を自から頌して曰く、

天は余に女の躰を與へたまへど、余が功德は尤とも大胆なる男子の行ふ所ろと異なるとなし、余が領するニナスの帝國は東しヒナコン河（今のインダス河也）に接し、南み乳香沒藥の產地に續き、北はサケー及びサーヂアに合ふ、蓋し余が領地は廣大にして其四方を全く承知するものあらざるべし、余は余が思ふ通りに河を流し、必要の地に河水を行れり、荒地は余れ水灌いで之を豐かにし、また敵の侵し難き强壁を築き、破り難き岩を通じて鐵路を開き、野獸横行するの地に余が車を通じ、多忙極まりなきの間だに快樂愛和の餘暇を得たり」と。

吾人は女性皆な如斯たれと云はず、然れども亦た如斯くたり得べしと云ふべし、女性の智德必らずしも男性に劣るに非ず之を安んぞ女性を以て遂に公事國事を思ふとを得ざるものとし、又思ふに適せざるものとなす乎。

况んや國を愛するとは必らず國の政事家たるの謂ひに非ず、國を富まさんとを欲して製糸織物に熱心するものは亦是れ愛國者にあらずや、民を教へんとを欲して教育保姆に盡力するものは亦是れ愛國者にあらずや、或は戰ひ起るとき軍費に寄捨し、負傷者を看護するが如き、或は慈善會を起し傳道費を集め、以て貧しきに惠み憫れむべきものを救ふが如き、苟くも其心國民を愛するに在ば亦是れ美なる愛國者にあらずや、而して女性は實に如此き犧牲献身を爲さんとを熱望し、如此き熱望を達して初めて心安んじ靈大ひに伸ぶるもの也、之を安んぞ女性に愛國の情なしと云はん。

然らば則はち女性に愛國の情乏しきは其天性に非ず、寧しろ其天性を曲げたるもの也、凡そ人其性を曲げたるより卑しきはなく亦た苦しきはなし、彼の女性をして愛國の情に伸ぶる所ろあらしめざるは、啻に女性全躰の大耻辱たるのみならず、實に其の大苦痛たり、况んや此れ日本國に取りて至大至長の

大損害たるをや、有志者切に之を思はざる可らず。

第三　賣國者あり、非愛國者あり

女性素と國を愛するの情に切なるべし、而して日本國現今の婦女子の如此く其情に疎澁なるは何んぞや、日本人民元來愛國の情に至温なりと稱す、而して其の女性に至りて特に然らざるは何んぞや、之れ實に女性彼自身の自ら成せるに非ず、社會の習俗之を縛ばりて遂に如此く疎澁なるに至らしめしなり。彼の暗谷流に棲ふ所ろの魚は眼なし、眼なきにあらず、在りと云へども見ざるが故に遂に見えざるに至れり、彼の男子は能く乳汁を出すとなし、出すとを得ざるにあらず均しく乳房ありと云へども長く出さゞるに由りて遂に出でざる也、大凡そ物之を用ひざれば衰ろへ、衰ろへて而して其性を變ず、故に女性元來國を思ふの眼識あり、國の爲に其熱血を灑ぐの愛情ありと云へども、世間若し彼等が眼を塞がしめ、彼等が熱血を閉ぢしめて、百千年間全く彼等を國と云へる者より遠ざけ去らんには、女性の情如何に温たかなるものと云へども終に之を失なはざるを得ず。

日本の習俗は久しく女性を閨門內に閉ぢ込めたり、之に公事を言ふとを得せしめず、其の喙を國事に挾むときは國直ちに亂るべしと思へり、若し輕々しく顏を窓外に出さば女德すでに廢すと爲ず、安んぞ口を門外に出すとを許さん、妻は只だ庖廚を以て國會議場と爲し、下婢下男と共に米鹽薪炭の議案を討論すべし、良人が家に歸りて顏色宜しければ天下太平なりと思へり、若又氣嫌惡しきときは國家大變ありと思ふ、所謂る世上の治亂なるものに就きては此他に感覺あるなし、嗚呼數千百年　如此にして女性を制限したり、今に於て女性が其家を以て天下なりとするは實に當然なり、彼等久く家にのみ着目したり、故に家を以て國となす、若し彼等をして久しく國家に着目せしめたらんには、彼等亦た夙に國を以て其天下となしつらん。昔し藩々割據する時に當りては、丈夫武士にすら日本と云へる觀念の甚はだ澁かりしにあらずや、只だ夫れ彼等直ちに日本皇帝の臣民と爲り、藩屏破れ率土の濱悉とく王土と爲るに及んで初めて日本なるものを惣念したるとを見ば、亦何んぞ今に於て女性に愛國の情疎澁なるを奇しまん。

內務大臣は外務大臣たるを得ざるが故に愚なる乎、若し果して然らば則はち女性の外事に冷淡なる亦得て嘲笑すべし。

嗚呼習俗よ、汝ち女性を壓制して如此くなせり、汝ち常に之より改悔して、我が姉妹を家外、公共の上に導びき來るべし、

一に汝ちが義務也。

然らずして女性の久しく今の如くあるは實に國家の大害也、啻に日本國に愛國者あるとの少なきのみならず、現に在る所ろの愛國者も將に之が爲に俗了せられんとす、故に古來大丈夫の國事を計るや、之を女性に洩らすとを以て最重の禁物と爲し、英雄大業を爲すの秘策として之を婦人に談ずるなきを敎ゆるや極めて嚴なり、而して如此き掛念は必らずしも徒らに婦女子を蔑視したるに非ず、實に多くの大事は婦女子によりて破れたる也、婦女子は淺薄にして之を口外したり、婦女子は昏愚にして、之を抑止したり、婦女子は戀々にして之を誘惑したり、如此して婦女子の毒往々國家の大事を害するが故に、丈夫はいよ〳〵其の大事を婦女子に洩らすとなく、婦女子は之によりていよ〳〵暗愚と爲れり、此に於てか勇士の戰場に斷出るを止めては、

折角顔見た甲斐もあふ最う歸るゝとは曲もない、親に背いてこがれた殿御、夫婦のかためない中はどうやらソツト心が濟まぬ、短い夏の一夜さに忠義のかくる事も有まい、是程迄に附慕ふ私が心思ひ遣つて見れもせで、心强やと、

緋縅の鎧にすがり付き、抱き付きて門出を止むるものあり、或は亦た、

二世も三世も女夫じやと思ふて居るに情けない、盃せぬが仕合せとはあんまり聞へぬ光義樣、祝言さへも濟まぬ内討死とは曲がない、わしや何ぼうでも殺しはせぬ、思ひ止まつて玉われと、

すがり歎げきて初陣に泣くものあり。嗚呼婦女子をして、良人に潔死か大勝かを勵ます所ろのパンテアたらしめず、又た盾を提げて歸れ然らざれば盾に乘つて歸れと敎ゆる所のスパルタの母たらしめず、只だ戀着執迷にして、慾に耽り國家を思はざるの肉菩薩たらしめたるものは、抑そも果して何人の罪ぞや。

第四　婦女子愛國の情

實に如此きは女性の恥辱たるのみならず、國家の大損害、大毒惡なり、吾人今に方りて之を矯正し、女性をして其自然に反り、切に國を愛するの民たらしめざる可らず。

其方法何如ん、曰く愚案する所ろ決して少なきに非ず、然れども其の直ちに今日に行わるべくして、而して其効能の直ちに明日より現わるべきものは、左の三事にあり、

第一　新聞紙を讀むとを奬勵すべし

第二　女學校に於て教養すべし
第三　父兄良人に於て談話すべし

新聞紙は是れ現社會の寫眞也、美事惡報双び現われ、盛衰興敗隣り映る、若し能く之を讀まば國家當今の形勢諒然として明らかならん、故に女性が之を讀むは、身閨房に在りて心すでに天下を横行し、坐がらにして八十餘州の狀態を承知するに同じ、此に於てか外國と我國との關係を知り、內閣と人民との關係を知り、貴族と貧民との關係を知り、或は九州の震災に胸を裂き、京坂の水害に心を痛まし、府會の醜事件に慨慷し、高等女學校の艷聞公判に痛恨苦憂する如き、皆な新聞紙の報道によりて感じ來る、而して是れ皆な國を思ひ國を愛するの端緒ならざるなし。

女學生は特に多く新聞紙を讀むべし、女學校は兼ねて不德ならぬ諸新聞紙を備へ置くべし、之よりして討論會話の緒ぐちを開らかしむる尤も善し。

又女學校の教師は機に臨みて日本現況の事に說き及ぼし、勉めて女生の愛國心を誘導するとに心掛くべし、吾人幾多の女學校を見るに此一事尤とも欠けたり、此れ殊に當今に於ける最重の欠點にあらずや、左なきだに女生は細話浮辞に流れ易し、之をして國家を思ひ、社會上の大不善、大不德に同情を懷かしめ來るは、今の女學校教師たるもの、最急務に非ずや、而して外國宣教師の設立する女學校に對しては吾人特に若く注意せざる可らず、其校の生徒は日常に洋風を見、耳常に洋況を聞き、心多く洋風を慕ひ、ロンドン、ワシントンの横町の事にすら熟知して、日本に官省の幾干ありやをも知らず、彼の米國ジョンストーンに大洪水ありしに淚を垂れて、今の奈良福岡に水害の非常なりしとを知らざるが如きあり、今の日本國に如此き女學生幾千を得るとも吾人は之を謝するを得ず、宣教師諸君は先づ日本國に於て教育するとを思はざる可らず、日本の女生徒を教育するとを思はざる可らず、特に明治今日の女學生を教育するとを深く覺悟せざる可らず。

父は折に觸れて公事に對するの意見を其愛孃に示すべし、兄は暇あるとき世上に關する學びたる所ろを其愛妹に告ぐべし、特に良人は其妻に成るべく外事を談ずべし、之を談ずるに初めは左程の益なきを覺えん、然れども之に由りて妻の同情を受け、爲めに喜を偕し悲を分つの愉快至大なるべし、况んや暫らくにして妻亦た外事の判斷に熟し、遂に良人が外務に於ける大ひなる相談相手となるべし、之を彼の良人の心を

知らずして徒らに怨み泣き小言し嗟天するの生人形に比して幾千の益ぞ。

以上三事の如きは直ちに行ひ得べきもの也、而して其効の現はるゝや驚ろくべく近く且つ大ひならんとす。

第五　日本至強の愛國者

日本婦人の今の如くなるは、實に日本の國民を半ば滅する也、日本愛國者の勢力を殺ぐ也、若し如此にして止まば日本に三千九百万の人口ありと言ふ勿れ、日本に愛國者多しと云ふと勿れ、滔々たる一千九百餘万の女性は名日本人民にして實日本國民にあらず、國を思はざる也、國を愛せざる也。是れ實に國家の益に非ず、日本國の名譽に非ず、吾等が敬愛すべき姉妹全躰の本分に非ず、故に吾人は日本國婦人の更らに眼界を濶大にし、思慮を遠宏にし、其の一家の事を思ふと共に能く社界公共の事を思ひ、隣家の噂の風評を止めて當世の人物を評し、薪炭鹽噌の經濟に注意すると共に國家の歳出入に掛念し、些々たる持病癪に屈せずして國中の罪人病人貧人に憐みを掛んことを希望す、而して又世上の習俗の變改して當に如此を希望するに至らんことを願ひ、更らに又世上の有志者敎育家の當に如此の養成に盡力するに至らんことを望む。

若し夫れ如此くならば、日本國に一千九百万の人口を増加したり、一千九百万の愛國者を新領したり、此れ我國に取りて幾千の幸福ぞ、陸軍十万、軍艦三十艘少なからざるに非ず、然れども一千九百万の愛國者を得るに比するときは抑そも富士山下の一小石のみ、二千三百万圓の軍費は硝烟と共に飛滅すべし、然れども此の新たなる護國者は容易に絶ゆることなし。今の女子教育に冷淡にして、只だ國防軍事に奔走するものゝ如きは實に大勢を思はざるの人也。

況んや是れ南瓜は南瓜を産むべし、今の如き婦女子の手に由りて愛國の子を得んと欲するは抑そも妄也、然るに此の婦女子を教養して之より切に國を愛するの母と爲らしめば、其子豈に勇猛義烈なる忠兒たらざらんや。昔し希臘の女丈夫テレシアは女軍を團結してスパルタ王の大軍を退ぞけたり、佛蘭西のジョアン、デ、アークは身貧農の娘にして蹶起し國を累卵の危うきに挽回したり、スペインのアゴスチナは佛軍九重に圍繞する孤城落日の壘に據り雄悍英畧にして能くサラゴッサの落るを救へり、婦女子にして一度び愛國の愛情に切まるときは古今絶倫の偉事を爲すと史上に例類多し。嗚呼是國家非常の時に於て現はるゝの異事たり、然れども若し平時に於て

幾多の如此き愛國婦人あり、其心によりて男子の愛國心を皷舞し、其手によりて兒童の愛國心を搆造し來らば、遠からずして日本人民は皆な悉とく日本の爲に敢死するの勇士烈婦人となるべし。於此乎東洋に富强國屹立し、國民國中に塡充すと云ふべし、而して其の光輝日輪と共に高登するに於ては、全世界の之が爲めに惠化せらるゝと非常なるべし。

論説

○「小説論略」質疑

松羅堂主人

春の屋主人の書生氣質以來文學盛んになりてやゝ成熟に近づかんとせり。此間に異論百出するは當然の事にて自ら小説を讀し事少なしと名乘掛て堂々と論じらるゝ女學記者の如きもあり。余は平生記者の言を——中にも小説に關する記者の説を讀み、論旨に敬服せざれど唯小説を見るの眼頗る重きに敬服したり。かくばかり人々の論ぜらるゝにも關らず、猶は小説をもて戲作と罵り度外に置く者さへあるに女學記者は常々是を輕過せずして手を盡し品を替へ辨論せらるゝは文界の人宜敷其道の爲に謝して可なり。

百七十七號の「小説論略」は記者近日の小説論中最も有力のものなり、有力なるが爲に記者が常の理想的女學論と同樣に尊ぶ人あるを恐る、是れ計りか如斯き説を讀みて白馬の辨も文壇を飾るべしと誤認せらるゝを恐る、わけて平生事を執るに極めて謹愼なる女學雜誌記者が敢果なくも自家撞着を吐かるゝ無鐵砲論客たるの毀を得る事あらんを恐る。唯是等を恐るゝ爲に無用の辨を好まぬ余も疑を質す事となりぬ。

小説論略六篇を概括すれば左の六者となる、

第一、　小説は實際を寫すものにあらず、故に實際派の小説も理想派の小説と變る事なし。

第二、　理想は人の通情なり、人の通情を寫すが實際派小説なれば理想小説も實際派と變る事なし、（此二者を合すれば實際も理想も差別なし）。

第三、　今の實際派小説は愛情下宿屋政治演説等に止まりて實際を寫せしといふは否なり、宇宙の事廣漠たるに唯一局部に偏するは其狹量笑ふべし。

第四、　自由に筆を揮ひて世間に媚びざるものを小説ならずと云ふは極めて僻見にて其愚憐れむべし。

第五、　最好小説とは道念純厚意思淸潔なるものなれば、

今の小説に最好ゐるはなし。

第六、　今の小説論者はみな偏僻にして後生を誤まる事多し、世人信ずる勿れ。

かく區分はせしもの丶記者の説は縱横自在にして其要を摘するに苦しむ。初めに實際も理想もなしと云ひ終に理想派實際派云々と云ふ如きは抑も筆端の覺へず迸ばしりし爲か、世間の小説論者はみな偏僻ゐりと罵らるれども是まで現はれし説を遍く陳列して共進會を開かば恐らく記者の説は偏僻の極端にあらんか、凡そ事を論ずるには信切の上にも信切を盡し如何なる迂人が讀むも明了たらしむるを要とす、記者の如く勝手氣儘に論定を下し證據をも引例をも擧げず、我が思ふ處斯の如しと獨斷主義に凡て他の説を馬耳東風視するは無責任の書生が政治を喋々すると同じく愚婦野人を欺くべくして識者の笑はん事を恐る。記者は世間文學者をもて任ずる人々を得意鷹の如しと評されたが自ら多讀せざるが故に迷に溺れずと揚言されしは抑ゞ猪進猪の如きか。

記者は此説を書かる丶に今日の如何なる小説を標準とせられしか。世には「弱い者いぢめ」とて最も弱きものを相手にお山の大將を擬せらる丶あり。記者の勇氣凛々たる恐らく此論の標準とありしは今日の錚々たる專門小説家春の屋二葉亭等の諸氏を相手にせられしなるべし、又小説とても是等諸氏が頭腦をしぼられたる傑作を目されたるならん。此四五年來出版になりしもの殆んど百を以て數ふ、もし記者が小説家或は小説といふもの此似而非者ならんには兎から曰はざれども直言憚らざる女學記者豈にかゝる卑怯なる振舞をなさんや。所謂揚々鷹の如き文學者を相手として何ぞ一々記者不滿の點を指摘して是を責むるの勇なきや。

第一、　是の説わけて珍らし。所謂リアルとは實際にもあるべきやうなる趣向を云ふ。もし記者の説を取りしならばリアルとは日本の實錄もの(實錄に實錄なけれど)の類ならずば當らずと申さるゝか。新聞の雜報の如く世間に起りし事件を種子として起草せしにあらざれば眞實のリアルならずと曰はるゝか。今日の小説の事實はみな作者の胸中に出で實際世間にありし事ならねば眞正のリアルにあらずと考へらるゝは大ゐる謬見にて世間に必ずあるべき事實を案出するをばリアル主義と申すなり。「浮雲」のお勢の如き必ずしもかゝる事實なきにしろ隨分有がちの人物ならずや、又「細君」の下河邊の如き事實は扨置き人物は世間に有觸れたる者ならずや。よし脚色

は作者の想像になるとも實際あるべき人物と趣向ならばリアルと申すも差支へあるまじ。記者が實際を寫すものにあらずとは實錄的にあらざる故にかく曰はるゝか、それとも他に理窟あるや。記者は天文學風土記の類の如く數字上にエキザクトならざれバ實際ならずと主張さるゝや。又實際を其まゝ寫せし美術は何國にありやと曰はれしが曾て記者は美術は自然のまゝを取ると說かれしならずや。よし前說を記者の誤謬としても實際を其儘寫せし美術あるを如何せん。美術の事に鈍意なる記者は日本に圓山派あるを忘れられしか、圓山應擧の繪を見し事なきや、應擧の傳を讀みし事なきや。又卑近の例を取るも坊間に見らるゝ錦繪は寫眞派の美術に屬するものならずや、そも是等を以てなほ實際にあらずと曰はるゝや。記者は常々西洋畫信仰にて日本畫——似而非繪工が書きし日本畫を罵らるゝは畢竟實際一點張の外はあらざるべし。然るに全じ美術で一は右に一は左するは如何なる理窟なるか。

第二、　是の說さらに怪しむべし。余は是を見て呆然一語の駁すべきなし。平生論理の精密なる記者が如何にしてかく馬鹿々々しき論法を持出せしかを怪しむ。恐らく記者が眞面目にて述べしにはあらざるべし。世人を愚にするもほどあるものなり。但し是をリヂキュラスとでも申すか。記者は眞實にリアルとアイデアルの區別を知らざるや。抑も殊更に知らざるまねして世を愚にするや、但し一時の議論を立つるに便宜なる爲め區別なしと云ふや。記者は馬琴リチャードソン及春の屋サカレーと對せられしがもし記者區別なしと曰はゞ何故に春の屋とリチャードソンを同視せざる。又記者は今日の後進が實際派にして先輩が理想派なりと曰はれしが如何なる作を標準とせらるゝや。余が見る處にては春の屋二葉亭嵯峨の屋の三氏を除けバ純然たる理想派も實際派もなしと考ふ。美妙齋主人の如きリアルの主張者と思はるれど其作「武藏野」「蝴蝶」近くは「いちご姫」の如き理想と申して不可なかるべし。其他南翠篁村紅葉等の諸氏の作或はリアルを主とし或はアイデアルを主としてリアリストともアイデアリストとも判然目しがたきに苦しむ。然るに記者はリアルとアイデアルとの區別さへ附きがたしと云ひて何を標準として後進派はリアルなり先輩はアイデアルと斷定せしや。

第三、　奇怪頓に一段を進む。今の小說家の材料大抵同一なるは衆人の喧しく說く處なるが立派に小說を論ずる記者が堂々と筆下せんとは思はざりし。前にも申せし如く記者はヨモ

や世間の似而非小說を標準とせられしにあらざれば試に余の知る處を擧げんに春の屋主人の「書生氣質」二葉亭の「浮雲」美妙齋の「風琴調の一節」紅葉山人の「京人形」南翠外史の「雛黄鸝」共醉居士の「外務大臣」坎柯山人の「濁世」嵯峨の屋の「くされ玉子」竹の舍主人の「蓮葉娘」等如何なる點が記者の氣に入らざるや。縱令材料は同一なりとも人情の秘奥に立入りしならんには何か不可あらん、況んや材料同一なりとも趣向の相違あるに於てをや。記者は宇宙の廣漠なるを知て下宿屋一軒の中に千變万化の奇觀あるを知らざるや。殊に最も怪しむべきは愛情を材料とするが何故恐しきぞ、もし愛情を材料とせずんば縱令記者の言に從て宇宙の大を寫すも無味乾燥なる哲理論となつて止まるのみ。一兩年前西洋心醉の人々日本の小說戯曲を猥褻と罵られしが今はこんな無茶論を吐くものなしと思ひきや、堂々たる女學記者が遠慮なく曰はるゝとは。さても〳〵「ドンキホーテ」も愛情の分子を含むよ。

第四、　余も流俗に媚びるは嫌ひなり。然し自由に筆を揮ひしとは如何なる類か、小說にも種類あれば廣く意味を取て是は小說なり又は狹く意味を取て小說ならずと云事もあらん。如何に自由に筆を揮ひしとて條約改正論が小說とは申されまじ、廣く曰へば是もリテラチュアの一なれど。記者が所謂自由に筆を揮ひしとは自墮落風來又今日にては「屑屋の籠」の類か。もし左なれば小說の類には相違なけれど眞正の小說とは云ひがたし。記者の言曖昧朦朧として識別に苦しむ。

第五、　益々解しがたし。道念純厚意思清潔とは卷中の主人公の心か但しは作者の心か。小說は云ふまでもなく經典でも修身書でもなければ初より終まで仁義德行信心冥加等の文字を臚列するを得ず。もし小說を讀むに道德書と同樣に考へ神と云ふ字信心と云ふ句がなしとて是は最高の意思純潔の結構にあらずとせば恐らく及第するの小說なかるべし。然し常に文學を喋々する記者が斯る淺薄なる謬說は抱くまじければ余は難ずるを要せざれど世には「ピルグリムス、プログレッス」の類ならざれば小說の最好と思はざるもの多し。上邊に飾る道德は記者の常に惡む處なれば卷中の事實が不道德なりとも讀者に不快を抱かしむるの巧あれば何ぞ仔細あらんや。「くされ玉子」の都之花に現はれたる時記者は口を極めて罵詈し惡魔の如く退けたり(批評の範圍を越て)。「くされ玉子」に閨房の樣を描きしとて左まで罵るにも當らじ、此段ありて更に讀者の不愉快を加愈々主人公たる淫婦を倦厭せしむるの情を勵

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

ますなり。もし作者の意思純潔ならずんば何んぞ此巧妙に到らん。記者は春水作の「英對談話」を讀みし事ありや、是を以て「くされ玉子」に比較し以て悟れ。余は當時嵯峨の屋氏が記者の爲め罵られしを憐れみ仝時に記者が平生の謹愼にも似ず極めて輕率なりしを怨みたり。記者の所謂純潔とは主人公道德溫行の君子にして仁義の道を終始講述するものか否か。

第六、記者は眼界頗る狹きに似たり。凡そ一家を爲すものは時俗に阿らず流行に走らず世論に迷はず獨立獨步するを常とす。今の小說論者を記者の說の如く偏僻となすとも偏僻の意見に迷ふものは到底大家となりがたし。記者は一兩年前の出來星政治小說家をもてなほ小說家を目して其人々リアル或はアイデアルに天禀の才ありと思ふや。美妙齋の前に純粹の言文一致を說きしものなく紅葉山人の前に雅俗折衷の文を作りし人なし、此二氏誰の說に迷ふて其文躰を創作せしや。近くは露伴子の如き西洋主義流行の今日に趣向は支那、文は西鶴の「露團々」を作りて世に現はれしならずや、是は入らぬ御心配と存ず。說は天禀の才を沒せず、天禀の才はよく說を作る。時俗に迷ふは流行を追ふ輕率者流のみ。

以上六者余の思ふ處斯の如し。記者の如く漠然と說去りしを一々指摘する事頗る難ければ余の質疑も記者の眼より見れば或は漠然たるべし。然れども余が反駁の漠然たるより記者の說は更に漠然ならんか。余も常々小說論を好み先人の說を窺ふ事間々あれども記者の如く自由とか世界とか人間とか宇宙をか九呑にしたる禪宗坊主が因果を含める樣な小說論を見ず。かく大議論をなして獨り高きに居る大見識は欽すべしと雖も若し此を以て文學を論ずべくんば世の中に小說を論ずるほど容易なるはあらじ。ちとの哲學論と宗教論を混和して是に文學者の名を並べて以て堂々たるべし。些細の字句に拘執する批評家多き世の中に大雜駁なる女學記者其人の如きもあり。是が自由人民の現想とでも申すべきか。

記者は今の文學者を罵りて局量狹しと曰へどある小說は小說と云ひがたきに依り小說ならずと申すなり。もし否なるものを否なりと云ふが局量狹きものならば凡ての公平なる批評家は恐らく局量狹きものなるべし。余は元より局量狹き人を嫌へど又哲學書をも修身書をも小說をも美術をも混同する極度の寛大論者をも好まず。

記者が所謂道念純厚意思淸潔なる最好小說とは今日までに世界に現はれし事ありや、但し記者一箇の理想なるや。現はれ

し事あらば其名を擧ぐべし、もし理想ならば或はユトーピヤ探見に船を大海に浮べると同じからんか。

余は「小說論略」に向つて喋々するを欲せず、唯反問を起して疑を質さん、

第一、小說とは何如なるものぞ。

第二、リアルは何故に記者の嫌ふ處ぞ。

第三、最好小說は今の世にあるや。

第四、所謂道念純厚意思淸潔とは如何なる類か。

右四件記者の詳解を願ひたし、博識なる記者、請ふ大議論を持出して鷹の如き文學者の嘴を折れ。

批評

(98)。躰育美貌論 中本一册二百三十頁定價七十五錢 發兌東京馬喰町二丁目 島村利助

此書は米人ジャックス氏の原著を川俣英夫氏が飜譯せられたるものにて章を十六に分ち、人身躰の構造、完全なる男女、躰質、人類成形の原則、胎生、童年期、智育の結果、道德及感情の影響、美術の影響、社交の狀態及職業の影響、氣候と土地の影響、直接躰育法、實地衛生法、成年女子の心得、長壽の秘法、美麗の術、等と順次に說述し、要する所ろは、伊國の婦人は年齢の進むに從て美麗も共に進む樣思はる年齢は駸々として進めども年齢の美麗を呑食する摸樣は殆んど目視すべからず伊國程中年女子の美麗なるものなし是れ伊國婦人の觀想力に富み精神力に富めるに因るならんと扨て伊國婦人の美麗を長く保つは健康を長く保つに由る然らば米國婦人も亦美麗を保ち得べき筈なり、(二二二頁)。と云ふの一理に在り、蓋し眞正の美貌は眞正の健康に原づくとを主張し、惣べて身躰を壯んにし精神を快ちよくして以て眞の美容を取れと云ふ、實に至正穩當の論なり。譯文亦た讀み易く斷えて解し難きを覺えず、時に、躰質を區別して、運動質、榮養質、などと云へる譯字も見ゆれど概するに先づ差支へ少なきの反譯書と云ひて可なり、鹿鳴館的、舞踏的、ヂシロイ的の婦人は先づ之を一讀してのち美貌を要むべし。

○ゴールドスミッスを評す（其一） 藤庵主人

余常に田園村居の詩を好み古今詩人中最も陶靖節を愛し、居常靖節全集を放さず其句を誦す、靖節の句彫琢を用ひずして盡く自然に成る、用語質素にして絕へて無用の粧飾なし、而も其高遠飄逸李杜と自ら異なりて更に超絕の姿あり。毛詩の

後楚辭秋風辭等一二の賞嘆すべきものあれども概ね浮華虛文に走り信あるの文字殆んど滅せり。獨り靖節其間に生れ流俗に阿らず簡古澹泊を以て主となし晉代歸去來辭一篇あつて尊しとまで稱揚せられたり。

五月以來余都門を去つて牛飽鷄鳴の間に住す。晨には村犬相應ずるを聞き夕には爐傍に蠶婦父老と談じ、晴日の候瘦馬の野水に飲するをながめ雨奇の景蓑笠翁の扁舟に棹さすを見て益々靖節の詩に感じ人に遇ふ每に其妙を嘖々す。

英國に於て田園の詩を賦せしもの多し。グレイのエレジー最も人口に膾炙し、青山一邱の土饅頭を見れば此詩を吟じて人生の定めなきを歎ぜざるはなし。グレイの詩巧みに村落の暮色を寫し、是を讀めば都門熱鬧の中にあるも朦朧たる遠山雲烟の間に出沒し農夫鋤犂を肩にして羸牛を逐ふの光景眼に映ぜざるはなし。而して余は是を喜ばずして却てゴールドスミッスの The Deserted Village を愛す。若し此二者を比較すればグレイの景を寫すに密なるは遙かにゴールドスミッスに優れども終に後者の情を描くに巧なりしに及ばず。グレイは古塚を點出するに先だち細かに晩景の轉た蕭索たるを寫し讀者をして徐ろに浮世の味氣なきを觀せしめたり。ゴールドスミッスは風姿を取る事極めて少なく專ら風情を先にして荒村慘憺たる光景を出せり、

"Ah, turn thine eyes
Where the poor houseless shivering female lies.
She once, perhaps in village plenty blest,
Has wept at tales of innocence distrest;
Her modest looks the cottage might adorn,
Sweet as the primrose peeps beneath the thorn;
Now lost to all; her friends, her virtue fled,
Near her betrayer's door she lays her head.
And, pinch'd with cold, and shrinking from the shower,
With heavy heart deplores that luckless hour,
When idly first, ambitious of the town,
She left her wheel and robes of country brown."

此一節を讀まばゴールドスミッス、グレーと異にして更らに無量の趣味を含蓄するを知るべし。

靖節の句又此の如く文字極めて質實なりし故是を愛吟する人に乏しけれど餘韵含蓄に到ては後の詩人の及ばざる處多し。もしグレイの詩を愛すると同じく景を寫すの細なるを求めば或は范石湖に讓るべけれど氣韵の高遠なるは共に語るに足らざるなり。蓋し靖節は五斗米の爲に腰を折らずと嘆じて五柳先生と稱して隱るゝものなれば其の作斯の如きは怪しむに足らざれど、唯ゴールドスミッスが一生貧苦不足の中にありて文字に現はるゝもの快活なるは其性質の然らしむるなるか。

エリサベス時代の文學者最も不遇ありしが斯る人の常として

厭世的の句口に出るは當然にして其作りしもの悉く不平不滿の氣を帶び時を毀り世を嘲り以て自ら慰む。獨りゴールドスミッス貧に生れ貧に死し食に一粒一片なく嚢中錢なく債主門に迫れども忻然樂む處あるが如し。故に口に出づるの句毫も厭世的の氣なく、"The Deserted Village"の如き慘憺たる題目に於てすら滿月蕭條の舊村落を寫すの中に太平の氣象自ら溢るゝの邊あり。

もしゴールドスミッスの作を讀み其人と其一生を想像して後更に其傳を繙かば想像の大に違ひたるに驚くべし。彼れ快活の調をもて滑稽を列べ世間を極樂淨土の如く寫したるに何ぞ計らん其一生は終始乏を告げたりとは。

今でこそ氏の作は英國文學の光彩を添へ氏の名はジョンソンの撰みたる墓銘と共にウエストミンスターアッベイに燦爛たれども其在世中の數奇實に憐れむべし。氏は質樸にして世に倨らず神を信じて自ら亂せず。而してなほ世に容れられず、生涯を不足に終り一日だも安んずる事あらざりし。

文學者は國民の最高位にありて其行性其才學並びに師範となり、間接に世を益する事少からざるに古來より最も不幸悲慘を嘗め衣食常に乏しきを告げ甚しきは餓死するに到る。若し天の道を知り其與ふ處を樂しむは何人ぞと曰はゞ文學者あるべきに何故に天は獨り文學者に禍ひするや。シエークスピヤ以後十七世紀及十八世紀間恨を呑んで一片の烟となりしもの今日文學の譽と曰はるゝ多し。ゴールドスミッスの如きは未だ餓死せしにあらざればトーマス、ナッシュの流亞に比すれば猶ほ幸福なりしとは曰へ、當時の債主氏が非凡の奇才を抱きしを許さず口するに尋常人を以てし是を苦しめしは無情の甚しき天何ぞ是等債主に禍ひせざりしや。

ゴールドスミッス性温和順厚にして世の輕薄文學者の如く俗に阿らず、身は負債山の如き中にあり。是を避けんが爲に或は山河千里を跋渉し或は債主の爲に抑留せられて其友に哀を乞ふ。噫、非凡の奇才を抱き終に Poor Goldsmith（貧乏ゴールドスミッス）と曰はれて終りぬ。余常に其傳を讀む毎に覺へず涙巾を沾す。唯ジョンソンの莊重なる碑銘を得て較や生前の數奇を慰むるに足れど今日に到つて氏の名文界に騷がしきにも關らず能く氏の苦辛を味ふもの少なきを怨む、ゲーテ、スコット、アービングス、ジッケンス等の人大に氏の作を味ふて是れを世に紹介せしが今日我文界氏の名を語るも充分に其眞味を試めしはなし。抑も氏の作味ふに足らざるか、將た

味ふも蒸豚鱸膾の如くならずと云ふや。防風粥一甌白居易是を食して口香ばしき事七日、荒村の詩一篇余是を讀んで三年口常に其妙を稱するを絶たず。

雜録

○自動的の英雄、他動的の英雄

ーのぶ

「日本人」に於て志賀重昂氏の此如く題する一論を讀み、今日かゝる無作法なる不德文字の尙ほ行わるゝを思ひて甚たく歎げきたり。夫れ狂流の西に怒奔するを東に反へし社會の大潮を轉じて之に一新方向を命ずるは豈に眞正の意義に於ての英雄にあらずや、如此き英雄は必らず先づ自動的ならざる可らず、必らず先づ戰裝せざる可らず、エメルソン曰く英雄の精は戰ふにありと、蓋し滔々たる社會の大流に逆らつて之を反對に却奔せしむるとを爲すが故也。今人もし進化論を可なりとせば、今の世界は即はち更らに進化せしめざる可らざるとを知らん、而して今の世界の更らに進化するは他に之を推進する所の幾多の原動力なかる可らず、其原動力中の尤も自動强剛なるものは即はち眞正の英雄に非ずや。故に英雄と云へば必らず自動的ならざる可らず、其功成り名遂るとに至つては固より得て望む可らざる也、何んとあれば彼れ英雄は素と現社會に逆らふものにして實に當世を提さげて逆行せんとするものなれば、其失敗し挫折し困倒するとの屢ば之れ有らんとは人に於て實に免れがたきものなれば也、然れども如此き不運命に會するもの、いよ〳〵多き程、其社會の大勢のいよ〳〵逆行せしめざる可らざるを知らん、然らば則はち彼の自動的英雄の大抵倒るゝものは豈に其の當然を得たるものにあらずや、若し夫れ、成功、榮名、幸福、益利、の外に英雄を動かすべきものあらずとせば則はち可也、苟くも勢の止みがたきものありて彼れ卒然身を挺起すとせば、丈夫安くんぞ、一敗、一死を懼るゝに足らん、見よ今の日本社會は吾々が順つて泳游すべきの快流に非ず。

○大統領ガーフヒールド氏夫人の麵包

かすみ

米國大統領ガーフヒールド氏は、彼のゼヨヂ、ワシントン、アブラハム、リンコルンの如く、數多其妻の助けを受けて大功を成就せられつる英傑なるが、此頃偶としたるとより、ガーフヒールド夫人が其良人に送られける手紙の公けになると出來にたり。蓋は嘗て此の大統領が長と爲られたるハイラム、カーレーヂと云ふ學校に勤むる、現今の校長ヒンスデール氏

が、一日其書生を勵まさんとて校に秘置れたる彼の手紙を朗讀せられしに由るなり、其手紙は固より異日人に見らるゝとは思はざりしならんに、其一部分に於て斯くは言ひたり、

「夏も漸やく終り候が此の夏の間だの困苦失望より俄わかに勝利の幸わひを得侍りしと何如計りの喜びぞ即はち君が立出で玉ひし後ちより只だうつら〳〵として左して考へもせず暮したるに一日忽まちにして妾わが魂しひの目覺めて勝を奏したるとにはべる、其時心に開得たる金言は「確かなる思慮は働らくものを幸福にす、然れども勞せずして確かなる思慮を得るとなし」との事にて、之を開くや否や立身の途すでに開らけたりと覺え侍りき、妾わが斯く開悟したる時は或る朝た麵包を燒きてありし時にて候ひしかば則はち自づから顧みて獨り語したるやう「此夏は貧苦に迫りて手づから麵包を燒かねば成らぬ境界に陷いりたりとは云へ此の麵包を燒くとも亦た最と樂しき一つの職業ならずや、而して此職業に勵み燒く所ろの麵包を一層立派に爲さんとを試ろむるは亦更らに樂しみある勉强にあらずや」と斯く考へしときは天より感化を蒙むりし心地し一生の望み忽焉として輝やげるやうに覺え恰かも照れる日光妾わが全身を透して麵包の塊まりに迄で通じたる如く此日よりして麵包の出來たゞあらず善くなり食膳の味前方とは雲泥の相違あるに至りき、抑も彼の金言は古へより聞きしものにて蓋し天地創造の時より在りし程の敎へにて侍らんが妾わが眞とに聞得たるは即はち此時にて此時より彼の金言は即はち妾わが物となれり、妾等は困苦を見て縮む可らず困苦の奴隸となる可らず寧ろ其正當の主人となり耐え行ひし万事の結果を悉とく妾等に獻納せしむべしと斯樣に深く覺悟し侍る、君は久しく獨立獨行ましまし常に君が事業の王と爲りて居ませしなれば妾わが斯く初めてのやうに言ふを可笑しくとそ覺し召さん亦た妾わが何とて斯く久しく心に冠むりもせで暮せしやと御不審ならんがたとひ君が御笑ひにて心を落さんとも此喜びを申上では安からず覺え候まゝ申上候……

良人出稼ぎし、細君家に在りて貧苦す、然れども此の輝やきたる思想ありて遂に大統領となり大統領夫人と爲れり。

○男だてが欲しゝ　　是空子

内辨慶の外すぼり程男らしくなきは無し、凡そ尤も男らしき男は、強きを挫いて弱きを助くるなり、故に番隨院の長兵衛は身を殺ろして人を助け、古しへのナイト武士は宮女乙女

を救ひて身を棄つるを快ろよしとせり、今の如き意氣地なき多くの男子ありては日本に何程の軍人軍艦ありとも所詮効なし、願くは男らしき大丈夫多く出來れよかしと思ふにつけては、其敎へ方一に家內の仕付に在りと悟る。

いたづら子僧遊びくたびれて歸り、チイ姉さん其の布團は私しが敷くんだよ、少姉さん其紙は私しが貰うんだよと、駄々をこねて紙を引たくり、坐布團の上にドッカと坐わり、乙女／＼と小き妹を召んで、お母さんの所ろへ行つて鋏を借りてお出で、と命じ持來るを不性／＼に取つて紙を散々に小さく切り其邊をゴミだらけにし、暑いと云ひて羽織を取て投出し、足袋を脫いで放り出し、何か嚙付たげに睨み廻すとき、母が出で來れば立まちかじり附き、お母さんお腹が空たよ早く御膳を食べさせてよとぐづる、母も甘やかして今直に出來ますよとすかせば、切度だよ早く仕ないと善ないよとあられもなき命令を言かけ、膳に向ひては吾さきに食べ御飯をこぼし、皆の畢らぬさきに足を投げ出すなど言語同斷、惡らしくもありわれにもある。

斯る我儘に育てられ、男の子はいつも姉妹に亂暴して勝手氣儘に生ひ立つなり、此子大きくなれば妻につらく當り、世間の女性に失敬し、惣べて弱きものをいぢめて强き人に屈服し、家の中で土俵をふみて、外でコソ／＼と歩るく、至つて面白からぬ男となるべし、故に其敎へ方家の仕付にあり、小さき時より姉妹に對し信切ならしむるやうにすべし。

みどり

○女性と公事國事

女性をして公事國事に注意せしむべきヿは本號の社說に見ゆる所ろなるが、此頃ろ英國ナインチーンスセンチウリー雜誌宣言と稱し一百四名の高等婦人が女子參政權の與ふ可らざるヿを公論したるに對し、更らにフホートナイトリー、レビウ雜誌に於て答辨し宣駁したるもの丶末に、之に贊成する所ろの婦人は必らずや彼の男子を敵視し若くは之に競爭せんヿを欲するが如き婦女子に非ず、彼等は固より十分に明白に男女に相違あるヿを確認せり、而して此の相違を頓着せざらんとする如きヿは毫末もなし、况んや女性をして其女らしきヿを失わしめんと欲する如きは些少たもなし、又彼等は只だ現今の法律の不公平なるに怒りて女性自から參政權を得と欲するにもあらず、實に彼等は他の多くの參政權を與へたるヿが即はち之を受けたるもの丶責任を增し投票の權利は人の品性の上に善良なる感化を與

ふるものたるを知りて則はち此權を求むる也、實に彼等は只だ男女によりて此權を或は與へ或は與へざるとは女子は到底公事國事の爲めに考へ又働らくに適せず且つ適する能わずとの謬見を強くすると信ずるが故に則はち此權を求むる也、實に彼等は現に社會上教育上職業上に於ける女性の地位の既に大ひに變化し進歩したるに相應して政治上に於ても亦た同じく其地位の變化し進歩し以て全躰の調和整治を完うせんとを欲するが故に則はち此權を求むるなりと。

東西皆な同じき叫び聲なり。

○多忙

田邨武治

都門八月風熱し氣蒸し紅塵十丈市街か沸き熱鬧賑へし高蹈閑適の士は皆遠く清風を幽泉奇石の間に訪ひ時に吟筇を横へて崔嵬を躋り天を仰て一嘯すれは山應ひ谷鳴り雲騰て石飛の聲あり九竅開豁神氣爽明直ちに羽化して雲霄を凌んと欲す獨り憐む此際散士は鄙都の矮屋に蟄居し俗事紛紜家累纏綿所謂不免靑山笑人ものにして碌々幾旬を經過せり今や蟋蟀堂に在りて西窓一葉の落るあり早や哲人は山を去り再ひ都門に還り吟囊を傾て千里の雲山を舒へ彼の胸間に磅礴鬱積するものを吐き天下の奇觀を一泓の硯池ニ瀉さんとするの時とはなれり。

元來事物の複雜多端なるは進化の象を顯はすものなれとも散士の多忙は寧ろ退歩の象ある如し何となれは則社會の爲に多忙なるとは甚た小部分なるへけれはなり然し禹の聖人すら三たひ家門を過て入らされとも九州猶未た溺流を免るゝ能はす左れは時ニ窮通あり身に浮沈あり志業世に適せすして慷慨其身を忘て孜々汲々たるも已を得さるとなるへし Addison は Surely, said I, man is but a shadow, and life a dream. と又 Byron は I had a dream which was not all a dream. と云へり蓋し春宵の花の如きは此世なり秋夜の月の如きも亦此世なり天の使も棲むなり諸魔も共に眠るなり只吾獨り吾にして先天の理を明にし天下の憂に先て憂へ天下の樂に後て樂ます繁閑窮通悲歡得喪散士に於て何か有らん。此世の百事は唯冷々看過し去れは鏡花水月一向に味なくペスシミストの如く萬事を歎く人たらさるへからさるも若し一轉して能く事物の原因結果を探らんには一浮一沈悉く至微至妙の攝理あらさるはなし故に人心にして能く天を包容するの餘地あらんか宇宙は誠に愉快の住所にして人事の窮通は晦明の差に異ならすパラダイス未た必しも失はれさるなり故に散士はオプチミストとして此世を樂む多忙中本年は徴兵檢査に合格し又々一事を増加せり聖書に : much is given much is required: とあるは散士如きは未た曾て多く與へられさるは素より社會より多く需めらるゝの理なし蓋し今日の散士にては蜉蝣と同しく生死別に世に損益なし左れは神は之を憫み散士をして不足を補はしめん爲め新生涯の苦辛を與へ玉へり以て後來能く人の僕となりて其足を洗ふとを需めらる是故に散士は深く此の新しき學校に入ることを喜ぶなり如何なる賢師良友の我を待つやと思へは紀の友則の歌に「我心いつならひてか見ぬ人を思ひやりつゝ戀しかるらん」とある心を推て前途の遼遠なるを樂めり。

蓋し社會の進むに随て人々均しく道德の觀念を發揮し頻りに神を求て安心立命の地を得んとするの傾向ありとす吾邦亦將來必す此運に際し福音の津々浦々にまて傳はるの時至るへし此時に當り何の社會か最も宗教心の發達に遲鈍ならんとせは恐くは武人社會亦其一に居るへし而して早晩祈禱を以て國會を開閉し祈禱を以て出陣凱旋を祝するの日あらんには素より今日豫め道を武人社會に傳るの用意なかるへからす散士身兵營に在りて朝夕切磋する所は鈐韜の事に非はなく起臥する所の貔貅虎賁の士に非るなけれは武人の狀態を窮むると敢て難事に非さるへし是れ大に將來に望ある一なり又散士才學淺近にして眼前に社界の大洋を俯ゆれは目に吾身の小にして愚なるを知る聊か退居讀書の緣に微ひ晝は鋭意兵を講し夜は雜談黄卷を繙は少しくは得る所なきに非さるへし是れ將來に望むの二なり散士か海外に在るや苦學最甚しき時幾多の米友の同境界に在るものと措擬せしに躰力常に彼等に及はさりし又屡々白髮の博士に接し其言論舉動を窺ふに皆な淵傑さして倚較三頭の勢あり勇敢剛健少壯の士瞠若として後に在り蓋し強壯の精神は強壯の身躰に在りて身躰強壯ならされは大事に堪へ難し暴風烈日に原野に曝され千軍萬馬の間に立て勝を一瞬に制す等其筋骨を強硬にし膂力を張大ならしむる果して幾干そ況や自治の民は其國を負ふの責あり國家危急の秋もあらは兵を知らさるは吾人の愧る所なるに於てをや是れ將來に望むの三なり。今日の散士は社會の竹屑木頭なり然れとも神は種々の機會を與へて之を鍛錬し淬礪月を涉るの時もあらは靜なれは則天下の僕となし動けは則國家の干城となし生死永く吾邦の泥濘を防んとす唯恐る散士此の御旨に負くとあらんを謹て頂々吾か境界を樂み以て自ら進て已さらんとを期せり多忙の餘永く雜誌に御無沙汰せり茲に其罪を謝す。

〇日本赤十字社錄事

日本赤十字社　寄送

〇瑞國赤十字新誌（昨年十二月分本年一月分）抄譯　千八百八十八年十月二十五日ジュネーヴ赤十字二十五年祭

ジュネーヴの本社は此貴重なる紀念日を祝典なくして經過せしむるのとをなさんや同府ルッソー島の對面「ホテル、デ、ベルグ」に開きたる祝莚に列したるは瑞士國の首府べるん府聯邦議院の議員、ジュネーヴの州廳及ひ市廳吏員、在ジュネーヴの赤十字同盟各國領事官已下五十餘名にして會食の終らんとする比ほひ赤十字中央社々長ギュスターヴ、モアニエー氏起立して赤十字の發起、沿革及ひ從來の事業に關する詳細の演說をなし殊に巧妙謙讓の言詞を撰んで同氏自己が其創立者の一人たるジュネーヴ會盟の歷史を陳述したるに列席者は謹て之を傾聽しジュネーヴに於て初めて赤十字の思想を挑起せし所以、爾後各國に於て恒存の赤十字社を設立し以て戰爭の苦艱を輕減し無用の慘劇を防止し概して戰場傷兵の不幸を慰藉し得るに至れる經歷を詳にし兼て赤十字の旨意が私人の意見に出て始めは只民間に於て之を唱道し之れを贊成するに止りたれば之れを實施の途に運ふの業は如何に困難なりや又斯く起立せし事業の各國政府及ひ交戰諸國の認容と保護とを占取して今日萬國人民を人類相愛の情義に繫聯したるは如何なる事態に由て來りしかを知悉せしめり同氏は又曰くジュネーヴの中央社は此寶貴なる事業に於て常に神火を保燃するの任を負へるものなり何れの邦國に論なく瑞士の國章たる白地赤十字を尊重するに至りしは亦同社勉勵の德に酬ひられしものと云ふも可ならんか其聲譽の一部分は今日仍ほ赤十字中央社の本據たる吾ジュネーヴ府并に瑞士國に反射し來れり吾中立なる瑞士國は實に此令譽あるを知れり故に亦此令譽に背かさらんとを希ひ且つ中立國たる責任を完了せんとを期するものなりと終に臨んで同氏は此貴重なる事業の當局者及ひ贊成者に謝し瑞士國の幸福無窮を祝して舉杯したり、瑞士國外務省書記官ローデ氏は之に對する答辯を述へ其長官ニユマー、ドローズ氏の事故に支へられて來會し能はさりしとを陳謝し且つ曰く諸員冀くは瑞士外務省如何なる場合に論なく其全力を以て此貴重なる赤十字事業を保護し進步せしむるとに贊助すべきを疑はるゝとなかれと茲に同氏は赤十字事業及ひジュネーヴ中央社の益〻隆盛ならんとを祝して傾盃せり次に中央社の書記官オーヂエー氏は各地より贈寄せる多數の書狀及ひ電信殊に瑞士國大統領バーゼル府赤十字委員及ひ獨、墺、匈、諾、威、塞爾比亞、希臘加之ならず日本東京より發せるものを朗讀せる後參事官ヂユナン氏はジュネーヴ州廳の名を以て市會議員ツルレッチニー氏はジュネーヴ府の名を以て、教授カルヽ、フォート氏はジュネーヴ大學の名を以て、領事シャンピー氏は佛蘭西合衆國の名を以て順次に祝詞を述へ仍ほ續て若干名の演說者あり殊に聽衆を感動せしめたるは二十五年前本社創立者一人にして最も久しく赤十字事業に盡力せる「ドクトル」アッピア氏の懇誠なる言詞を以て其舊友たる社長モアニー氏の健康を祝し同氏は此祝筵の開設者にして今日の榮譽は主として同氏に歸すへきを稱道したるものなりし其他ロザン府の陸軍大佐セルソール氏が婉麗痛快の辯を以て從來戰場の露と消へたる多數の戰士も實に吾赤十字事業の仁愛を保証する無言の證人たるべしと言及したるが如きは最も著大の喝采を博せり而して日本委員スクリバ氏が同國赤十字社の狀況及ひ事業を報道したるは最も聽衆の注意を喚起したるものにして同氏（氏はダルムスタット府の產にして尤も流暢なる獨乙語を以て說話せり）の陳述に據れば當時日本赤十字社の社員は五千名にして特に同國皇后陛下の優渥なる眷顧を蒙るものなりと云ふ〇ジュネーヴ府は此二十五年祭の紀念となし且つ赤十字會盟の中央社を本地に設置して該社にジュネーヴの名を附せられたる榮譽に報答せんが爲め其市內の一街に赤十字町なる名稱を附與せり。

希臘赤十字社

希臘赤十字社最近の報告は設立（千八百七十七年六月十日）已來十年間同社事業の總概を擧けたり其事業の如きは已に本誌（瑞國赤十字新誌）に掲けたるとあれば今復た再述せず資金は設立已來の收入百四十九萬五千百七十二「ドラクマ」（「ドラクマ」は吾金貨二十錢）にして支出は九十四萬七百三「ドラクマ」又現今の資產は五十五萬四千四百六十八「ドラクマ」にして近來平時事業に支出したる金額はボスポルス海に瀕する一市メガ、レウマの火災に於て被害者救濟として四千百二十「ドラクマ」其他の火災、被害者に總計五千百「ドラクマ」を支出したるが如き是れなり。

〇吸がらから生へた烟草

お庭に烟草が見へますがお植あされたか苗でもおまきなされましたか。イヤ左樣でも御坐らぬ大方掃除のとき吸がらでも落したでござらう。

〇七字の念佛

鳶の者題目のかけ物を買ひコレ五郎見や本尊がないから念佛を買て來た。ドレ〳〵念佛は六字だが見ば七ッだぞ。そんな

ら南無阿彌陀佛様であらう。

○兼房と友禪は明後日

御好次第朝顔咲せ處と看板を見て內へはいり瑠璃紺が望みでござる。なるほどお目に掛けませうと鉢植の蕾を出す直に咲く。是は奇妙紫と赤とは成ほど〻又咲かせる。兼房と友禪はナ。それはわさつて。

○無　精

つまみな賣呼込まれ見れば佛頂面の男諸道具を取ちらして居る故こわい男と思ひ三文といふを十文が程をく。それほどは入らぬ少しをけト云ふ。ハテわきとはきつい違ひトいへば揃へるが面倒だ。

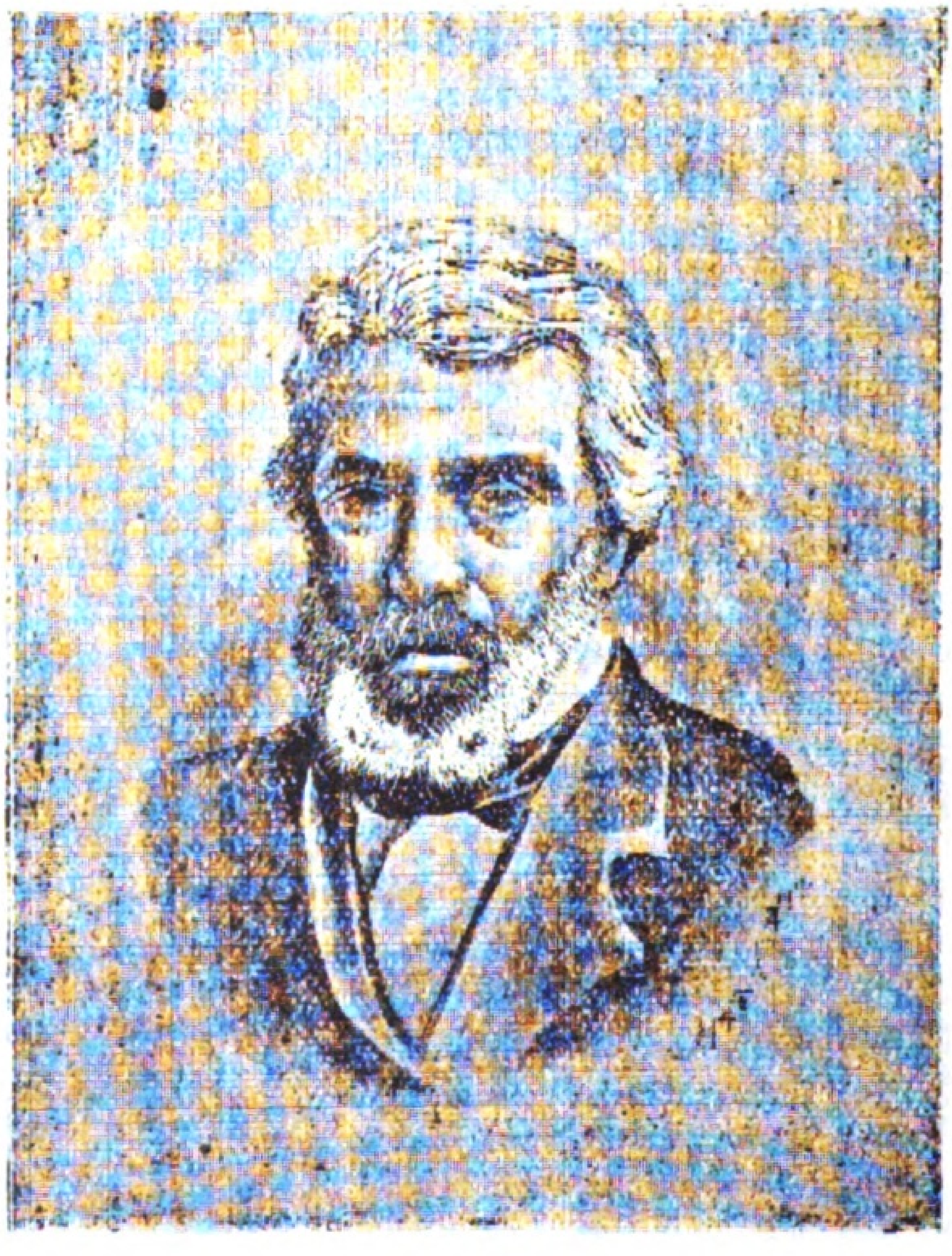
○わるい流行

血氣の男同士行きちがいさま横頰をしたゝかくらはす。アイタ、なぜ叩いた。馬鹿め今はやるが知らねエか。なにはやる長くは續くまい。

史傳

○トマス、カーライル傳　と、　ら、

博士サムエル、ジョンソンが文界の宿將を統帥して其文躰思想を支配せし以來未だトマス、カーライルの如く英國思想界の潮流を激せしめたる文豪を見ざるなりカーライルの哲學論は迂遠なりしかも知れずカーライルの社會經濟策は實行せられざるかも知れず然れども彼が英人の思想を色づけ形ち作り



しとは蔽ふ可らざる事實なり彼は一個の哲學を創見せしにあらず然れども彼は尤も新鮮雄活なる思想を有せし人なりしなり思ふに道德論者ほど不幸の地位に立つものはあらじ宇宙廣く万有多し大學術家發見の材料は實に無盡なり悲しむべし道

義哲學者に至つては新機軸を出すの餘地幾何もあらず眞理は万代に亘つて眞理、不德は千古不德に相違なくプラトー孔聖の唱へたる勇氣は十九世紀の今日尙ほ勇氣たるを失はず前進後學の士唯だ同一眞理を復習するのみ而して尤も古びたる眞理格言に尤も新規なる服裝をなさしめ再び天下の面前に其威力を示せし功に於て十九世紀の英國カーライルを除いて又た誰かあらん。

▮カーライルハ一千八百九十五年十二月スコットランド、ダムフライサイア府に生る鄕黨の業を卒へアンナムの中學に入十四歳エヂンブルグ大學に遊び茲に留ると七八年カーライルは尤も算數の學に長ぜり素と宣敎師たらんと志ざせしが大學を卒ふる前已に其念を絕てり大學に在る間カーライルハエドワード、アイルヴィングと友とし善し二人の性情は全く相反せり▮カーライルは沈欝眞而目寡默常に考ふる所あるが如しアイルヴィングは之に反し活潑激烈にして熱心に談ずるや手を擧げ眼をむき出し頭を動して談ず然れども二人は實に刎頸斷金の交をなせり。

▮カーライルの著「サルトル、リサルタス」は彼の自傳なり書中の主人公トイフエルドロックはカーライルにして其遊學せしと云ふ獨乙の大學校は思ふにカーライルの敎育せられし蘇國の學校のとなるべしブルーミン（小花）と初戀の始末は事實なりしや否詳ならず且書中の靑年主人公トイフエルスドロックは學校に在る中已に價直ある一生を送らんと志ざせしと明なり氏が始めて寄書せしはロンドン雜誌にして當時の主筆は有名なるライ、ホント及ひチヤーレス、ラムなりし其頃サー、チヤーレス、ブレウスター百科全書出版の企擧ありカーライルは氏の爲にモンテスキユー、モンテーン、ノルフオールク、子ルソン將軍、老ピット及若ピットの傳を纂す思ふに此時已に後來の大作佛國革命史及フレデリツキ大帝傳を腹案せしならん又佛人レゲンドルの幾何學書を譯し自己新創の比例論を付し之を出版し數學者の名を博せり。

一千八百二十六年ウエルシ孃と婚す孃はジヨン、ナツクスの後裔なり伉儷の生涯の幸福なりしとは氏が其妻の死を愛惜して余が生涯の光消へ失せたりと云ひ又之を傳して彼女は四十年の間余が爲し或は爲さんとせしすべて高尙なるとに於て余を慰め呉れたりと云ひしを以て證すべしカーライルは獨人ゲーテの名著ウイルヘルム、マイスタルを英譯せし緣故を以てゲーテと友となり互に相見ずと雖ども此二國を代表せし兩文

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

傑は書信を往復して交情を通ぜりと云ふ殊にカーライルがゲーテに宛て己が家内生活の實景を尤も樂しく尤もおもしろく寫して送りし書狀今尚ほ存す讀者若し英國第一流の文人のホームを知らんと欲せば就いて見らるべし婚姻の歳始めてエヂンブルグ雜誌にヨン、バウル、リヒテル論を投寄せり是に依て英人は初めて獨乙にリヒテルあるを知りしならん。

カーライルのカーライルたる名を博せしは其著作の故を以つてなり彼は寧ろ無事の生涯を送れり故に之を傳する者も亦た其著作を列擧して之を評判するを以て足れりとせざる可らず茲に其文體に就て一言せざる可らず夫れ左傳ありて始めて左傳の文あり史記ありて始めて史記の文あり曠世の文家は決して先人の逞を踏み徒らに古法に拘泥せずカーライルも亦た一新體を創めたり而して其体はゲーテの哲理小説「ウイルヘルムマイスチル」を譯する間に得たりと傳ふカーライルの文は一種異樣なり語路頗る長く時として曖昧捉る能はざる感あり然れども思想迂曲遍廻端睨す可らず而も一條の心線達貫す故に難ずる者は口を極めて難じ倣する者は力を盡して倣すカーライル出でゝより數年の間苟も文壇に立ち一方の旗幟を植つる者にして多少カーライル躰を摸倣せぬ者とてはなかりける又た以て拔群の一躰を新創せしを見るべし。

獨乙文學を研究せし結果は一千八百三十四年「サルトル、リサルタス」を徹して天下に知れ渡れり此書の草稿は許多の書店より斷はれし後遂に綴物となつてフレーザース新誌紙上に現はれたり此書は小説にもあらず又たしつかりしたる自傳にもあらずトイフェルスドロックと云へる獨乙哲學者の思想行徑の一斑を其選擇に依つて編したりと云ふと雖とも其實此主人公は著者自身なり成るべく原文の語路を存すと唱へ間々括弧を加へ獨語を插入す故に邦人英語に精しき者と雖ども少しく獨語を知らざる者に取つては頗る晦澁にして讀み難きの感ありトイフェルスドロックとは英語の塵埃の義にして其出生の場所「エントフール」は鵝池の義出版所「スチール、シユパイケン」商會は默々商會、其商會のある都府の名「ワイスニヒツトトユー」は誰不知那處の意なり若し少しく獨語を心得ある者「サルトル、リサルタス」を取つて之を誦せば快味云ふ可らず卷を終ふるまで休む能はざるならん此書の世に出づるや批評八方より起り多く之を難ず親友スターリングすらこの文躰は前例故格なしと云ふて咎めたり殊に知らずカーライルは是に依つて一派の文章を剏めたるとを。

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

「サルトル、リサルタス」未だ喝采の岸頭を漂ひつゝありし間カーライルは居を倫敦に移し一千八百三十七年一生の大著佛蘭西革命史を世に公にせり是より先き氏は千八百三十五年獨乙文學と題し倫敦に於て數席の講莚を開き翌年近世歐州革命論を講じ其翌年則ち一千八百三十七年佛蘭西革命史出でゝ英國文海晴天に暴雨に遭ひたる觀あり千八百四十年英雄及び英雄崇拜と題し講述せりかく二三年の間に不朽の著述をなし一時に文界第一流の高位を占めしはツヲター、スコットがウエーバーレー小説を筆してより以來曾て迹を絶ちし異現象なりとす。

一名優の好尚さえ時としてはよく一代の服裝を變ぜしむる力あり文學は人間の心事に拘はる一世を統帥すべき學者出づるときは其感化實に測る可らずカーライルの名今や書生小説家新聞記者雜誌愛讀者貴公子愛嬢の符牒語となりたり何人もカーライルに似たる文章を綴りカーライルの如く談話す。

佛國革命史の著は史學に一紀元を開きたり從來歷史と云へば無味乾索なる事實を臚列したる者と外思はざりしカーライルの史を著すや前人に卓絶したる識見を以てす其事を叙する流麗にして而も其相を沒せす其人を斷ずる確固而して過奬過貶の弊なし事實の因果人物の得喪に於ける彼の斷案は最後の判決にして又た動す可らず忠魂義膽のラアフエット優柔深酷のルイ十六世輕佻無操のロベスピーア、ニラ、ダントンの輩カーライルの睥々たる眼光に照されて粲然讀者の網膜上に映じ來る一千八百四十三年「過去及現今」出づ過去を論ずる頗る可なり現今の斷案は未だ全く其當を得たりとは云ひ難かり越えて二年オリヴハー、クロンウエルの書翰及演説と題して英國共和政府の保護者と稱せられし大傑の性行經歷を傳す是より先きクロンウエルに就ては萬人衆口其説を異にし或は極端の改革者となし或は一世を籠絡し非望を成就したる大奸雄となす此書出でゝ二百年の後英國革命家の首領クロンウエルの心事始めて世に明になれり。

一千八百五十年「ラター、デー、パンフレット」翌年ジヨン、スターリング之傳刊行せらるカーライルのスターリングに於ける交誼は實に劉葛水魚の間柄なりしスターリング先づ逝くカーライル追悼して之を傳す此書大にボスウエルのジヨンソン傳に似たり彼は傳せらる者傳する者より世に聞えたる人にして此は傳する者當代の名家傳せらるゝ者却て大に知られざる人なりし思ふに大文人と深交するほど幸なるはなし時として

は其手を經て末代まで傳へらるゝ僥倖なしとも云ひがたしカーライルは數年間フレデリッキ大王の傳を編著中なりしが一千八百五十八年巳に其第一卷を出版せり是より先カーライルは獨國漫遊の志を懐きしと久し此著に着手するや大王の戰迹を訪ひ地形を察し或は英國に於て得べからざる古文書を閲せんため初めて獨乙に旅行せり一千八百八十一年二月五日散文の泰斗カーライル沒して英國文界の一大星永く滅して光なしカーライルは熱情の人なり轍頭轍尾眞面目なり彼は詩人ホーマーの散文家となつて再生したるものなり人或はカーライルの措辭誇大に失すと訴ふ是れ皮相の見のみ熱情内に鬱して外に發す猶火氣地底に堪へ發して火山となるが如し轟然爆然天柱折け地維摧く常人見て驚嘆す然れども理家は其因を知る以て怪しとせざるなりカーライルの譏刺の鋭利なる其論辨の壯大なる其叱咤する江河の決するが如きに於て彼はバイロンに似たり蓋し彼の筆は詩人の熱情と史家學術家の綿密とを自由自在に驅りたて彼をして彼の如き大文字をあさしめたる也。其道念の高潔なる其の所執の確固あるに於ては近代の文人中其匹儔を求むれば大西洋の對岸に於てエマルソンあり二子共に「チーチユーア」の愛兒なり故に自然を慕ふ最も深し彼等は自然に心意を求め俗界を去つて宇宙萬象と歡談す學術家は肉眼を以て自然を觀察し其整然たるに驚く二子は靈眼を以て自然の心意を見る故に其歌ふや天使が靈界の秘奥を人間に向つて發露するが如し其論ずるや俗人曉らず或は以て奇怪の言となす二子の異同を云へばコンコルドの哲學者は飽くまで厭世家にしてカーライルは厭世家ありしとなり傳へ言ふ胃は二氏の哲學に大影響を及ぼせりとエマルソンは常に健全なりしがカーライルは絶へず胃弱を患へり一方は唯自然と共に歡娯せんとし一方は人生の弊所欠點を怒罵し掃却せんとあせる者の如し健康の心志に於ける力も亦大なる哉。

嗚呼日本當代の文學は皮相なり付やきなり眞似なり飜譯なり剽竊に非んば金錢のための一夜作なり何ぞ道念堅固理想絶高なる大シニアス起ッて一世を風靡せざるや吾人は日本にカーライル、エマルソン出現せよと絶叫するものなり。

○ドクトル、アダ子ウ氏曰く、人決して其妻の泣くを痛むると勿れ、凡そ婦人の泣く間だは亂暴なる業を爲すとあらず、必らずや眼つねに乾ける婦人よりも忍耐愛情强からんが故なり。

兒籃

○チャーレーの强膽（上）

しづ音

マリーさん何處へいらつしやるの又山へ御いでなさるノデスカ、イーエ今日は母が病氣ですから山どころではありませんいま氷を買に行くのです、とマリーは友達のチャーレーに答へていそぎ走り去りましたチャーレーは山へ栗を拾ひに行かふと思つても獨りではつまらぬ故ドーかして友達がほしい誰れか來ればよいがと人まち顏に佇んで居りましたがだれもまいりません故フト思ひ付てもうそろ〳〵日暮にもなるし山へ行くには遲ひようだからマリーの母が病氣を見舞ふ方可然とすぐに道をかへてマリーの家へといそぎました、マリーの家は山の麓にて貧しげなる一軒屋です前は滊車道で後は嶮しい山が聳えて居りますマリーの家の前を一町ほども行くと滊車道より谷河に渡してある一つの橋があります最も重き滊車がゆき通ひする橋の事故隨分丈夫には出來て居りますがまだ假橋の事故そのはしの前にて滊車はいつでも速力をゆるめてそろ〳〵とこの橋を渡るノデス、チャーレーはマリーの家へいそぎましたが此の橋を渡ると最も近い故汽車道を傳はつてこの橋を渡りいそいでよう〳〵マリーの家へ付きましたがまうこの時は四方は眞暗になりました四五日前よりふり續く雨が今朝より全く晴れ渡りましたもの丶チャーレーがマリーの母を尋ねんと思ふ頃よりまた空が曇り始めマリーが家の門口へ來ました頃は雨がポッツ〳〵とふり出しました。

チャーレーは戸をあけてマリーの母が寢臺の傍らへ參りいろ〳〵と問ひなぐさめました表ての方は眞暗です大分に時間が遲くなれどマリーは歸り來ません自分も母がさぞかし待もし心配もしおはさんとは思へどもせめてマリーの歸り來る迄は慰めんといろ〳〵信切に話しをしかけましたがマリーの母我子の歸りが遲ひため何となふ心配そうに見ます。

チャーレーは　マリーさんが遲ひようですから私は見て參りましようキット滊車道を御かへりにちがひありますまいとマリーの母に語をのこし早くも帽子をいたゞき蝙蝠傘を借りていそぎ走りいだしました雨の上に風さへ吹きそえて物凄ひ樣は何とも申しようがありません一町ほども參りちようどかの橋の處へ來て見れば四五日前よりの强雨のために流れ激しく山より土を落し來りて橋の近くは悉く水があふれ出しましたチャーレーは渡る事も出來ず如何はせんと

思ふうち河上より二本の大木が矢の如く流れ來りかの橋げたにつきあたると忽まち橋は半ばほどくづれてしまいました。

小説

（本號餘白に乏しく此の欄を省く）

寄書

○誤り易き言語（中）　依田雄甫

○にとへとの區別　「箱根にまかりける」と「箱根へまかりける」とは同じからずそはいづこにもあれ其處をさして他より旅行するとき又は其處へゆく途中にていふ時は「何々へまかりける人に」「何々へゆくとて」などいふなり既に其處に至りていふ時は「何々にまうでゝ」「何々に行きて」などいふべし

○かとやとの區別　かとやとはともに疑ひの辭なれどもなにといふ詞の下におく疑ひの辭には必ずかといふべしやとはいふべからず「いづくにかゆきけん」「幾日か經ぬる」「何をうしとか」などいふべし「いづくにや」「幾日や」「何をうしとや」などいふべからずこれもまた物集氏にきゝし所なり委しき事をしらんと欲せば紐鏡中の心を見るべし

○物事を二つならべていふ時には上と下とにと字を用ひて「萩と女郎花とが咲く」「新聞紙と雜誌とを見るに」などいふべし「萩と女郎花がさく」「新聞紙と雜誌を見るに」などいふは宜しからず

○べからずは禁止の辭にはあらず

三綱五常の道のみは天地と與び傳へてかはることあるべからず（鳩巣）

かたき若し釜山城を攻め取て候はんには本朝の通路自由なるべからず（白石）

微妙玄通○深不レ可レ識（老子）

敗軍之將不レ可二以言一レ勇（史記）

などいへる言語を見ても知るべしべからずとなかれとは其意たがへり

○ばかりといふ辭はのみといふ意の外ニほどころなどいへる意あり「十五夜ばかり（頃）の月を見る」「酒をあくばかり（程）飲む」の類の如し

○ましには歎息の意を含みたると企望の意をふくみたるとの二種あり歎息のましは多く Conditional sentence（英語を挿むはよろしからねど和語にていかにいふべきか未だ之を知らねば姑く之を假用せり）○中に在りて其 Protasis 大底ば字にて終るこれなきは企望のましなり

世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし（歎息）

花みんとうゑけん人もなき宿の櫻は去歳の春ぞさかまし（企望）

新報

○驚くべき女子教育の進步

海南新聞九月六日の雜報に左の如き一項あり、

越智郡殊に今治市街に於て近來女子教育の進步發達しゝは實に驚くべきものにして本縣内地に比すべきものなきは論を待たず他府縣にても亦た多く見ざる所なり此の起因する所を尋ぬるに基督教の感化與かりて力あるの事實なば疑見せり其故如何となれば女子教育に熱心なるものは多く今治市街の基督教信者にして而して卒先女子を各地の高等なる女學校に留學せしむる所のものも亦た槪ね今治市街の基督信者なればなり試みに越智郡内の女子にして近來他の地方に出で高等の學科を卒業し及び目今留學中のものを通算すれば三十名にして其校名人員は神戶女學校に留學するもの十四名、同校を卒業せし者五名（内一名は東京明治學院助教、二名は山陽英和女學校教師、一名は熊本女學校教師）大阪梅花女學校に留學するもの二名、同照暗女學校に留學するもの一名、同一致女學校に留學するもの二名、京都同志社女學校に留學するもの二名、山陽女學校に留學するもの一名、松川女學校に留學するもの三名にして其他京都看病婦學校に於て卒業せしもの一名尙ほ幼稚園の保母となり或ひは大阪に於て音學を勉强し居るもの等あり而して以上多くは今治市街商家の令孃なりとは實に感歎すべき次第ならずや。

○レピット夫人

前年我國にも巡廻し來られたる同夫人は、其後支那印度亞弗利加諸洲を遊說して此頃ろ遂に英國ロンドンに歸り來り、彼のジョンブライトの妹なるルーカス女史初め其他幾多の女權伸張者に非常の歡迎を蒙むり居らる。夫人が米國を離れてより既に五年、會に臨みて演說すると一千三百回、親から人に口演したると幾萬と云ふを知らず、足殆んど全地に涉り、最早全米女秀才のエルカユ、ホームを聞きて米國に歸らるゝならんと、吾れも人も信じ居たるに、此頃夫人が米國の友人へ寄せられたる私信なるものによれば「余が此の旅行に付ては之れ余が畢生の事

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

業なりと言ふとを得せしめ玉へ余が健全の續かん限り、惣べての大陸を巡り終りし迄は、尙更らに此遊說を延ばさゞる可らず」とあり。嗚呼夫人が初めウイラード女史と相ひ談じ只だ信仰と志と道とを抱いて米國を出立せらるゝや、未だ必らずしも米國婦人禁酒會の遊說員として命ぜられしに非ず、況んや其旅費入用金の如きは別に貯ふる所ろもあらざりし也、然るに一片忠實熱信の氣は常に夫人を前程に導びき、到る處ろ有志者の寄捨歡迎に迎へられ送られて今や殆んど全世界を一週したり。夫人の叫び廻られしは啻に禁酒會上の勸告に非ず、其通行したる所ろ常に大なる感銘を遺し去れり。

○亡き母の遺志

遠州豐田郡中野村の金原明善氏は、其地の舊家にして家政豐かなれども、人と爲り質素勤儉にして身に奉ずる所ろ極めて粗惡なるも意とせず、公共の利害と聞ては資を投じ勞を忘れて從事し、往年天龍川の水溢れて沿岸の地を害する年々甚しきを憂ひ、先づ自から其家資を政府に獻じ遂に同川河身改修事務所を起したる慈善家なるが、此度和歌山奈良福岡縣下の水害を聞て慘狀を傍觀するに忍びずとし、左の書狀を時事新報社に送られしよし同新聞に見えたり、

本年和歌山、福岡、奈良三縣下の洪水は實に非常の慘狀を極め之れを傳聞するもの誰か酸鼻せさらんや我同胞たるもの默止するに忍ひす聊か相恤の衷情を表せんと欲し明善か亡母遺金の內五百圓を以各厄者の中に就き最甚きもの一回の食を欠くときは忽ち萬金の性命を失ふと云ふ如き必死に瀕するものへ贈るを得度心得なれとも如何せん地は數百里の外にありて三縣下に分れ其詳細を知るに由なし且其被害區域の廣大なる到底五百金を以遍ねく志を達するを得がたし思ふに新聞紙は所謂社會の耳目なれは寧ろ時事新報社を煩はし其見る所に任せ贈金者即ち明善の志を亮察し可然取扱を懇請するときは必す贈金分配方の宜きを得へしと思考せり幸ひに時事新報社に於て承諾を得金員分與の手續上贈金者の名を顯はさゝることとなれは金原明善亡母（志賀）と云ふ名を以致されたし今回の贈金は全く亡母の遺金にして其性質を云ふときは去る嘉永二酉年母の病篤きに臨み明善に告て云く爰に二十五圓あり是吾平生儉素を勤め得たる所のもの今汝に授く宜しく蓄積し以て他日多額に至らは殉國忠士の爲に菩提を吊するの供養とせよ嘉永以來國事多端我夫（明善か父）東西に奔走力を國事に盡す殊に居宅は東海道にあり早駕或は網乘物等門前を過るを見後に開けは志士仁人の國家の爲に死したるもの多しと他年是等の中に就き汝自から擇んで其跡を吊せよと云々此遺言を守り已に三十八年を經、積んて殆んと一千圓に及ふ則ち亡母の志を繼んと欲し其人を求む我か知る所を以てすれは吉田松陰、佐久間象山、藤田東湖の三士なりと思惟せしか藤田氏は舊藩士中其人ありと聞く佐久間氏は未亡人に於て已に建碑の擧あり其議に預りたることあり殊に吉田氏は其志最も我信する所にして昨年中奔走盡力せしこともあるも未た其事を遂くるに至らす然るに目下三縣下水害同胞の慘狀を聞く此の如し急遽に臨み片時も躊躇すべきに非ず由て該蓄積金の內を以て一時轉用之れに充て有餘は漸次蓄積して其舊額に復せしめ機運の來るを待つも敢て亡母の志に背くものに非すと信じ此贈金の擧に及ぶ素と亡母の遺金なれは茲に亡母の名義を以て贈寄する所以なり貴社幸に右の意を諒し金員送達の勞を吝まるゝ無くんは幸甚

○躶躰人の畵

見るに忍びざる躶躰畵府下多くの繪草帋屋の店頭にあり、如此きものを作りて美術に適へりと云ふは何等の謬見ぞ、當路の人速かに之を撤去せしめざる可らす。

外報

○生繭　米國キウミン郡のゴルドン夫人は繭を試作したるが當季に至り一萬個を得たりと云ふ。

○懸賞　同じく米國バンカーヒルのカゼツン、プレーア孃は今年十六才なるがセントルの新聞紙より童男童女の讀みて宜しき書目十種を募りたる懸賞に對し三百二十人の應答者ありし中ち一等賞を得たり。

○料理學校　亞米利加のエムマ、エウイング夫人と云ふは此六年間夏期に當りて料理學校を開設し來られしが當年の如き二百人の女生あり益々成功多かりしよし。

彼之

○女官方の義捐　皇后宮職香川敬三子及び女官方二十五名より水害罹災者へ救助費として金五百圓（內二百五十圓を和歌山縣へ、百五十圓を奈良縣へ、百圓を福岡縣へ）義捐せられしと云ふ。

○京都婦人慈善會の義捐金　京都婦人慈善會より罹災の窮民救助として京都府下へ金三十圓奈良縣下へ同二十五圓和歌山縣へ同二十五圓を義捐なし其配附方は其の府縣廳へ依賴せり。

○上益城郡中島村婦人親睦會　客月二十六日の事なりとか中島村大字金內渡邊順喜氏の宅に於て婦人親睦會を開きたる景況を聞くに元此の地方は政黨競爭の熱度盛熾なる所にして婦人も亦政治の思想を煥發し一般に改進主義を負抱するもの少なからず同會の開設も是等婦人の手に歸したる者にて就中宮部ほも子中川かじゆ子兒玉じゆか子美濃部ちき子兒玉つや子中川さか子の諸婦人非常の熱心にて開會するに至り來會する者百餘名正午の鐘報と共に會主ほも子は開會の主旨を述へ次に中川かじゆ兒玉じゆかの兩子席上演說をなし尙ほ宮部氏は改進黨の主義目的を懇切に演したるが其妙所に至れは拍手喝采の聲一時に發し余程の盛會なりと云ふ（熊本海西日報）

○紅楓女學校　名古屋區袋町一丁目三十四番戶に同校を新設し九月九日より開校せり當日より婦人學會を廢せり。

○岐阜縣　方縣郡七郷村福島じよう孃は風俗を矯正せん爲めに自ら發起人となり美の婦人教會を設立せんと目下奔走中のよし。

○杉浦重剛君序○中川重麗君譯述

女子之務

右は主ら著實なる主義を執り女子の敎育、女子の工場、職業、手藝、齊家、保育、家婦、兒母の任、文學、音樂、精神の修養、美情の啓發、社交宴會、茶話小集、讀書、結婚、處女の務、眞女子の理想、國民心、愛國心、等の事項を痛論したるものにて目下我女子敎育の時弊に對し實に鍼砭藥石の價値ある文明女子の必讀書たり敎化書たり請ふ一讀の榮を賜へ

全一册 定價金八拾錢 郵税廿二錢 金字釘裝美本

神田區淡路町二丁目四番地 尙友社

大賣捌 ○東京日本橋通三丁目・後凋閣 ○大坂備後町石井釣三郎 ○京都三條寺町 杉本甚助

○女生徒募集廣告

當校今般從來ノ組織ヲ一變シ敎授上學年上大ニ改良ヲ加ヘ殊ニ和漢學ノ程度ヲ進メ併セテ歷史地理物理化學博物化學生理家政育兒法等ニ力ヲ用ヒ卒業後將來社會ニ出テ婦女ノ務ヲナスニ當リ實地ニ應用スルヲ以テ養成ノ主眼トス有志ノ者ハ來學アレ

望ノ者ニハ本邦書ヲ敎授ス敎員西洋人四名本邦人七名九月十二ヒ十三日ニ入學試驗ヲ行フ詳細ハ當校ニ就キ或ハ書面ニテ問合セラルヘシ

明治二十二年八月

築地新榮町三十八番館 立敎女學校

移轉及生徒募集

今般地ヲ三田聖坂ノ高臺ニトシ校舍寄宿舍ヲ新築シテ本校ヲ此ニ移セリ抑モ地ハ品海ニ面シ眺望佳絶空氣純潔ニシテ頗ル身躰ノ健康ニ適ス且今般規則ヲ改正シ外國女敎師ヲ增加シ大ニ授業上ニ改良ヲ加ヘタリ校舍新築落成正サニ近キニアルヲ以テ落成ノ上直チニ授業ヲ始ムベシ入學ヲ望ム者ハ郵券貳錢ヲ送ラバ規則書ヲ呈スベシ

芝區三田功運町三拾番地 私立 普連土女學校

生徒募集廣告

來る十六日次學期を始む各級共缺員あり入學を許す且つ今回寄宿舍を改築し更に裁縫敎師一名を增聘し和英漢諸學共一層懇篤に敎授し實地長足の進歩を計らんとす志願者は陸續申込あれ但し當分の內何時にても入校を許す規則書御入用の方は郵券二錢を投ずべし○月俸二圓二十五錢○校費二十錢○月謝七十五錢

伊豆國君澤郡三島町百二十五番地 薔花女學校

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

○文部大臣従二位勲一等子爵 榎本武揚公題字
○帝國大學醫科卒業受驗生 三島通良先生編述
○醫科產科婦人科教授醫學士 濱田玄達先生
○大學小兒科講師醫學士 弘田長先生 校閲

はゝのつとめ

文章は談話躰の平假名交石版木版書入日本綴美本

親の巻

婦人懐姙より出産迄及び七夜中養生法凡四章二十七節
定價金三拾錢(郵税金六錢)

子の巻

小兒分娩より學齢兒となる迄の養育法及教育法凡八章五十五節
定價金四拾五錢(郵税金八錢)

婚禮の祝産見舞誕生祝の進物には此に勝る好物なし

此書は著者が我國に母子衛生法を記載したる完全の書なく稀に有之は多は衣食生活を異にする西洋の翻譯物又は專門家に非ざる人の著書のみなるを嘆し積年大學に在て研究したる實驗に諸名家の卓説を參照して編述せられたる書にて我國に雙びなき兩專門教授い此が校閲を爲したる上。繁簡其宜を得、取捨其當を失せず。高尚なる學理を以て卑近なる實際に徵し、平易の談話に依りて精微の意旨を明にす。その賞讃を與へられたる古今無比の良書なれば世の貴婦人方必ず一部を購ひて國家を利し己を益し給へと云爾

○發兌書肆○日本橋通三丁目丸善○馬喰町二丁目島利○通旅籠町中央堂○本郷春木町島利支店○

發兌				
九月。七日	十四日	廿一日	廿八日	
十月。五日	十二日	十九日	廿六日	
十一月。二日	九日	十六日	廿三日	三十日
十二月。七日	十四日	廿一日	廿八日	

定價		
一册。六錢	郵税。一錢	(但府内無郵税)
十册。五十八錢	郵税。十錢	(同前)
半年分	一圓四十三錢	府外は一圓六十九錢
一年分	二圓六十錢	府外は三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲ぐる毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行(廿七字詰)	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京京橋區彌左衛門町吸々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文春堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西内大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年九月十二日印刷
明治二十二年九月十四日出版

東京京橋區日吉町八番地
發行所 女學雜誌社

東京京橋區日吉町八番地寄留
編輯兼發行者 巖本善治

東京芝區源助町十一番地寄留
印刷者 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.
"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six month *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY